

《私の国語教室》

「国際交流活動」からの学び

河田 良子

本稿は、学校教育にグローバル化への対応が強く求められている昨今の状況のなかで、私という個人が、高校の国際交流活動から得た学びを述べたものである。

私は、大阪府に採用されて十一年目、勤務校は三校目になる高校教員である。このうち特に、前任校と現任校は、SSH (Super Science High school) 指定校だということもあり、国際交流活動が比較的さかんな学校だ。私自身も、英語科以外の教員としては、国際交流活動にかかわることが比較的多く、会食に同席したり、京都観光に付き添ったり、研究発表会を横目で見たりと、生徒の様子を見る機会には恵まれた。今年度は、二週間の語学研修にも同行した。さて、こういった「国際交流活動」において、私がかかわった多くの生徒に共通する課題がある。それは「やりとりが致命的にできない」ということだ。

国際交流活動のなかには、公的な場でやりとりをする機会がある。たとえば、研究発表会であれば、その内容について質疑応答の時間が設定されているし、留学生や海外の

大学生を囲む交流会では、進路決定や目標について話してくれた彼らが、「何か質問はない?」「将来の夢は?」などと生徒に問いかける場面がある。こういったとき、私がかかわった生徒のほとんどは、あいまいに頷き、見当はずれの返答をするか、目をそらして黙り込むか、(おそらく)思ってもいないのに「そうです」「大丈夫です」などと短く答えてやりとりを終わらせようとするかになってしまう。

私的な場でもそれは同じだ。海外の高校生を迎える会食の際、来日した生徒とテーブルを囲んだ生徒は、そこに顔見知りの同級生が複数いるのにもかわらず、ふたことみこと話をしたがり互いに俯いてしまう。学校案内では、「これは茶道部です。彼らは日本の伝統的なお茶の作法を勉強しています。では、次の部活動を見に行きましょう」と言ったさきり、黙って歩き出す。現任校の生徒たちは、語学研修中、ほとんど毎日のように「ホストファミリーとの会話が続かない」という苦勞を、互いに分かち合っていた。

一方、海外の生徒は、ほんとうに、とても自然にやりとりをする。前任校で、日本の高校生とタイの高校生が一緒に京都大学の研究室を訪問し、特別講義を受けるプログラムに同行したことがある。講義中、タイの高校生は臆することなく(というよりも、質問をすることに對して「臆する」という感覚がないように見えた)しばしば質問を投げかけ、講師の先生も非常に自然な様子でそれに答えていら

っしやった。おそらくこういういった態度が、「グローバルスタンダード」なのだろうと、強く実感した次第である。

なぜ生徒は「やりとり」ができないのだろうか。もちろん英語力も多少は影響しているとはいえ、私には、コミュニケーションにおける生徒の課題、つまり、やりとり（議論・質疑・対話・会話）についての経験と自信のなさ、国際交流活動の場で顕在化しているだけのようにみえる。

特に高校において、生徒は日常生活でほとんど異質な他者とかかわらない。同じ学級、同じ部活動、同じ塾の仲間とおしゃべりすることはあっても、近所の大人や、そもそも家族とさえ、きちんとした「会話（説教、報告、おねだりではない）」をすることはまずない。教室では、意見の相違よりも、むしろ同質性が歓迎され（文化祭のとき、学級の出し物が決まりそうな空気の中で、「うちには劇よりも模擬店の方が向いていると思う」などと言いつつ生徒は、多くの場合、喜ばれない）、教員―生徒間のほとんどのコミュニケーションは、一方的に通達される形で行われる（教員は「会話のふり」はするが、生徒からの応答がなくても差し支えない）。こういった同質的かつ一方向的なコミュニケーションをいくら繰り返したところで、やりとりの経験にはならないし、自信も育ちようがない。

では、どうすればよいのか。
やりとりの経験と自信の問題は、量と質の問題として考

えることができそうだ。そこで、まず、やりとりの「量」を増やすことを提案する。また、もちろん、そのためには、やりとりしたいと思える題材、つまり、私たちを揺さぶり、思索に導き、対話に誘う「良質な題材」が欠かせない。

ここで、国語科教員としては、やはり「文学」の意義を再確認しておきたい。国語科教員の感傷、ではない。やはり文学には人が在り、社会が在り、埋めるべき空白が在り、それらは語られることを待っているからだ。特に近年、生徒たちは自分や自分の周囲について直接的に語ることを恐れているようにみえる。だからこそ、たとえば「羅生門」における青年の不安定さや、「山月記」における表裏一体の自負と恐れ、「舞姫」における大義と個人の葛藤など、すぐれた作品に描かれる、事実を超えた真実についてやりとりをする経験は、いつその意義をもつ。また、やりとりをとおしてそういつたまなごしを獲得することが、次のやりとりを支えもするだろう。

しかし、「良質な題材」は文学だけではない。そのつもりで見れば、私たちの周囲に、それはあふれている。

たとえば、今年度、ある公人が現任校を訪れ、全校生徒を相手に話をした。その人物は卒業生であり、生徒に発破をかける意図で「最近うちの高校は〇〇高校や△△高校に負けているなあ！ 僕はみんなに期待しているんだから、もっとがんばろうよ！」という意図の発言をした。

こういったとき、教員の反応は大きくふたつだ。すなわち、これを生徒との話題として取り上げるか否か、である。私自身は、これは教室で取り上げるべきだと考えた。そこで、「卒業生が活躍し、メッセージをくれるのはうれしい。しかし、公人として学校の序列を認め、根拠なく『負け』だと断じるのは不適切ではないか」と話した。反応はさまざまだったが、「あれは俺も気になった」や「まあ偏差値やる、しゃーないわ」などと発言する生徒も何人かいた。

ここで強調したいのは、私の発言そのものではなく、この一場面の重要性でもない。毎日の生活のなかで、それぞれの教員が「良質な題材」を見つけ、やりとりを繰り返し返そうとすることの価値である。そういった営みがまったくない学級と、さまざまな教員が多様な価値観で語り、自分たちもその語りに参加する経験を重ねることができる学級では、生徒のやりとりに対する姿勢も、大きく変わるはずだ。次に、やりとりの「質」について述べる。やりとりは経験によって磨かれるものでもあるので、前述のように、良質な題材に支えられたやりとりの「量」を確保することで、ある程度の「質」の向上も見込めよう。しかし、ここでは、それに加えて、学校生活全般における、教員の介入と評価の重要性についても指摘しておきたい。

高校では、多くの教員が、少なくとも表面的には、「自主性を育てる」ことを重視している。たとえば学級で行事

の出し物などを決める際、担任の教員が進行を生徒に一任し、自分は黙って教室の後方に立っていることがある。介入することが、生徒の自主性を妨げると考えているのだ。また、たとえば自治会役員の候補者として演説したり、講演会の講師に質問したりしたとき、その勇氣や挑戦をほめることはあっても、その内容やふるまいの是非を論じることはほばない。評価が生徒のやる気を殺ぎ、自主性の芽を摘むと思っているのだ。

しかし、教員を十一年間やってみてようやくわかったが、それは間違いだ。生徒のやりとりの「質」を育てるために、学校生活全般における、教員の介入と評価は不可欠である。介入とは、質の高いやりとりを行うための、「大前提」の絶え間ない確認である。そのやりとりの目的、生徒に望む参与の仕方、あるべき人間関係の在り方を、教員が生徒に投げかけることで、生徒たちの活動は、形骸化した話し合いから質の高いやりとりに近づく。また、評価とは、「望ましい姿」に照らして生徒（たち）がどこに在るかを述べることだ。発話の内容や応答の態度、着眼点など、教員が具体的な指摘を行うことで（それがあつては）射たものであれば、生徒たちは、次の機会によいやりとりをめざす。結局のところ、そういう形でしか、やりとりの「質」は育てられないと思うのだ。

今私が述べたこと、つまり、一人ひとりの教員が、それ

それぞれの教育的価値観と鑑識眼をもって生徒を見、介入し、評価することは、ある先生方にとってはごく当然のことだ。

しかし、実体験に即していえば、かなり多くの先生が、自分がそうあることについて引け目やおそれをもっているようにみえる。昨今の「有用性」や「可視性」を礼賛し、「無駄」や「瑕疵」をことさらに嫌う風潮のなかで、あいまいさや矛盾をかかえたままの自分として生徒の前に立ち、語ることに勇気が要る。また、高校においてはことさらに前述の「自主性を育てる」という建前が、そういった引け目やおそれへの言い訳として機能する。

現在、学校教育はサービス業化し、教員は均質化されている（大阪府ではこの傾向が強いように思う）。私自身もそうだが、教員としての自我が育つ前に現場に出た教員は、抑圧と慣習のなかで、まずは、無難な、交換可能な存在として教壇に立つしかない。考えてみれば、皮肉にも、このことはある意味で、（資本主義的）グローバル化の一面を如実に反映している。

しかし、グローバル化とは、異質なもの同士の絶え間ないコミュニケーションが求められる場でもあり、そこに参与しようとするかぎり、常に問われるのは「個」であるはずだ。もはやグローバル化から逃れられない世代を育てている私たち教員は、学校を取り巻く、サービス業化・均質化の奔流のなかで、まず自分が「個」と

して生徒の前に立ち、語るという、ごく当たり前の在り方の価値を、もういちど見直すべきではないだろうか。

国際交流活動における生徒のやりとりの問題とは、すなわち「個」の問題だ。生徒にやりとりができないのは、彼らが「個」として問われる場面がないからであり、それはすなわち、一人ひとりの教員が、サービス業化された学校において、均質化された存在に成り下がってしまったことの残念な反映でもある。

であるならば、私たち教員は、もういちど「個」として在ることに立ち返るべきだ（もしくは「個」として在ることを知るべきだ）。そして、一人ひとりの教員が、「個」として立ち、生徒とやりとりを重ねることをとおして、生徒が「個」として立ち、やりとりをするための学びを支えるべきだ。それを実現させるのが、おそらく、本来の意味での「グローバル化への対応」なのだとは私には考えている。

以上が、生徒の国際交流活動から得た学びである。

（大阪府立生野高等学校）